

〈黄帝と老子〉雑観 第11回

王の治身が治国の本である

『黄帝内経』と黄老の「治身治国」思想（前編）

『黄帝内経』 研究家 松田博公

ツイート 3

いいね! 1

第6回 [『黄帝内経』と戦国黄老の気の系譜 『黄帝四経』から『春秋繁露』まで](#)

第7回 [『黄帝四経』～『春秋繁露』を貫く機械論的宇宙観](#)

[『黄帝内経』は戦国の「天道」思想を引き継ぐ（その1）](#)

第8回 [『黄帝内経』には天を畏れる災異思想の痕跡がある？](#)

[『黄帝内経』は戦国の「天道」思想を引き継ぐ（その2）](#)

第9回 [天地人三才思想の源流は黄老文献にあり](#)

[『黄帝内経』は戦国の「天道」思想を引き継ぐ（その3）](#)

第10回 [天道は循環し、経脈も循環する](#)

[『黄帝内経』は戦国の「天道」思想を引き継ぐ（その4）](#)

黄老思想の研究史において、『史記』太史公自序の「六家の要旨を論ずる」が重視されてきたことは、この連載の第5回に触れておいた。司馬遷の父、司馬談の手になるこの文章は、史上初めて「道家」という名称を使い、当時、優勢な思想潮流であった黄老思想を紹介している。この考え方こそ統治思想としてバランスが取れ、網羅的で、最も適切だといえるのである。

「道家は人の精神を純一にし、行動は形なき究極者に合致し、それ自身で充ち足り万物にゆきわたる。その方法は、陰陽家の大順をうけつぎ、儒家と墨家の長所をとりいれ、名家・法家の要所をつかみ、時勢によって移り、物に応じて変化して、習俗をたて政事をするのに、どれも適切でないものがない」

「道家」は、老子・荘子の思想と陰陽家、儒家、墨家、名家、法家の思想の長所を採り、天地宇宙の法則に合致した柔軟な思考方法を持つというからには、司馬談が語る漢代初期の「道家」とは、いまわたしたちがイメージする純粋な老荘道家ではない。これぞまさしく諸思想を統合した一大潮流、黄老道家だったのである。



■近刊情報（DVD）

●[自分の体にハリをしよう！刺さないハリ 森本式鋲鍼を使った自己治療の実際](#)（岸田美由紀出演）

[今週号のPRの部屋はこちら](#)

●[変形徒手矯正術セミナー](#)（2014/12/6）

■[ヒューマンワールドのセミナー](#)

●[情報コーディネーター鍼灸セミナー](#)（2014/12/14）

●[「ていしん入門」セミナー](#)（2015/2/8）

★ヒューマンワールドの本なら→→→→→ [こちら](#)

★ヒューマンワールドのDVDなら→→→→→ [こちら](#)

■投稿原稿募集

週刊『あはきワールド』では、研究レポート、論説、症

「六家の要旨」が、このように黄老思想の複合的性格を明確に彫琢したことは、研究者たちが黄老思想を分析する際の一つの礎石となってきた。しかし、「六家の要旨」が、論述の末尾に、君主が形神（肉体とスピリチュアルな精神性）を修養すべきことを強調したのを、司馬談の個人的な趣味ではなく、黄老思想の普遍的な核心に関わる事柄と気づいた研究者は、近年まで多くはなかった。以下の部分である。

「人には天から与えられた神（＝スピリチュアルな精神性）が生じ、それは形（＝肉体）に託されている。神大いに用れば竭（つ）き、形大いに勞すれば敝（やぶ）れ、形神が離れば死ぬ。死者は再び生き返ることはできない。神が形を離れてしまうと再び帰ることはできない。だから聖人は形神を尊重する。このように考えれば、神は生の本であり、形は生の道具である。先ず神を定めずして、「我に天下を治める用意あり」などと言うのは、どんな根拠があつてのことか」

この記述が、第5回にまとめた黄老思想の5つの構成要素、

- (1) 政治への濃厚な関心
- (2) 天地宇宙の理法（上下に循環する気の運動、四季の変遷など）に準拠して政治を行う「天道思想」を基礎とする
- (3) 君主は天に倣って無為、臣下は有為という役割分業を採用する
- (4) 君主の治身を治国の要とする「治身治国」論に則る
- (5) 道家を中心に、儒・墨・法など諸家を採り入れる複合思想

のうち、(4)に該当することを研究者が知るためには、1973年の『黄帝四経』の発見以降の黄老思想研究の活性化が必要だったのである。

馬王堆漢墓から出土した『黄帝四経』の内容が学界に公表され、『黄帝四経』と在来の戦国～前漢の文献との関連性が検討されるのは、1980年代になってからである。従来、個々別々の文献として研究されてきた、『管子』『呂氏春秋』『淮南子』『春秋繁露』は、黄老文献としてひとまとまりの視野から読解されるようになり、齊の稷下の学で学んだ孟子、荀子の書『孟子』『荀子』なども黄老思想との関係から分析されるようになった。

◇治身と治国は一理の術なり

こうした戦国・漢代思想史の枠組み転換の中で、黄老思想のサブシステムとしての「治身治国」思想が注目されたのである。秦の呂不韋編纂の『呂氏春秋』は、漢代初期の「六家の要旨」に先行するが、そこには、次のように君主の治身が治国の基礎だという理念が宣言されている。この文章から、中国の研究者は「治身治国」という凝縮された概念を引き出した

例報告、エッセーなどの投稿原稿を募集しています。

★詳細は≫≫ [こちら](#)

★メディカル求人天国

鍼灸マッサージ師・柔道整復師の求人情報は≫≫ [こちら](#)

■ヒューマンワールドのメールマガジン「あはきワールド」は毎週水曜日に配信しています。

★配信登録は≫≫ [こちら](#)



日中台湾の黄老思想研究書。日本での単行本はまだ、右の2冊のみ

のである。

「治身と治国は一理の術なり」（知度篇）

「およそ事の本は、必ず先ず身を治す」（同先己篇）

「昔は先ず聖王其の身を成して天下成る。其の身を治めて天下治まる」（同）

「天下を取らんと欲すれば、天下取るべからず。取るべきは、身まさに先取るべし」（同）

「夫（そ）れ、慎むことを知らざる者は、死生、存亡、可不可、未だ始めより別あらざるなり（＝最初から分別がないのである）。……此れをこれ大惑と謂う。かくの若（ごと）き人は、天の禍する（＝わざわいを降ろす）ところなり。此れを以て身を治むれば、必ず死し必ず殃（わざわい）あり。此れを以て国を治むれば、必ず残（そこな）い必ず亡ぶ。夫れ、死殃残亡は、自ずから至るにあらざるなり。惑い之を召（まね）くなり」（重己〔＝おのれを重んじる〕篇）

王の身体とは、王個人のものではない。王の身体は天下国家と一体であり、天下国家は宇宙と一体である。ここにおいてもまた、中国思想の永遠の金太郎飴構造であるフラクタルな仕掛けが働き、気思想と天人合一観に導かれた身体国家論が展開されているのである。つまり、中国的システムにおいては、王もまた天地宇宙＝国家＝身体の網の目にがんじがらめであり、自由人とはとてもいえないのであった。

この「治身治国」論の系譜は、『呂氏春秋』にさらに先立つ齊の稷下の学『管子』にさかのぼる。

「我が心（こころ）治し、官（政治）乃ち治し、我が心安んじ、官乃ち安んず」（内業篇）

「心安んず、これ国安んずるなり。心治す、これ国治するなり」（同心術下篇）

「心（しん）の体に在るは、君の位なり。九竅の職にあるは、官の分なり。心は其道に処り、九竅は理に循（したが）う。嗜欲充益すれば、目は色を見ず、耳は声を聞かず。故に曰く、上、其の道を離るれば、下、其の事を失う」（同心術上篇）

こうした戦国の「治身治国」論は、漢代に入ってもすたれなかった。

『淮南子』を見てみよう。

「いまだかつて身治して国乱る者を聞かざるなり。いまだかつて身乱れて国治する者を聞かざるなり。身は事の規矩なり」（詮言篇）

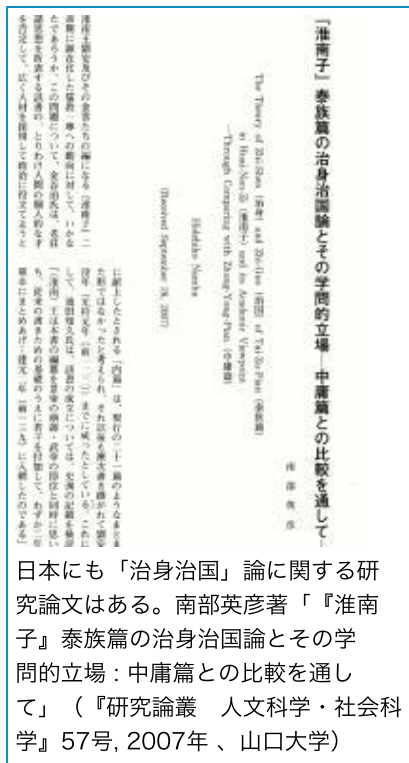
「心（しん）は身の本、身は国の本」（同泰族篇）

「それ欲に従いて性を失い動けば、いまだかつて正しからざるなり。以て身を治すれば則ち危うく、以て国を治すれば則ち乱れ、以て軍に入れば則ち破れる」（同齊俗篇）

上記の『淮南子』詮言篇の文章が、『呂氏春秋』重己篇の「これを以て身を治むれば、必ず死し必ず殃（わざわい）あり。これを以て国を治むれば、必ず残（そこな）い必ず亡ぶ」を踏まえ、かつ司馬談の「六家の要旨」の「先ず神を定めずして、「我に天下を治める用意あり」などと言うのは、どんな根拠があつてのことか」に対応していることは明らかだろう。『淮南子』と「六家の要旨」はほぼ同時代の著述である。

では、前漢思想の集約点であり、黄老文献の終着点でもあった董仲舒の『春秋繁露』では、「治身治国」論は、どう扱われているだろうか。武帝時代、すでに国家は複雑な官僚制によって運営される体制にあった。董仲舒は、国王の治身の論理と、官僚支配下の国家統治の論理をいかに結びつけるかに腐心した。巨大国家の複雑なシステムに合わせ、「治身治国」思想も深化を遂げなくてはならない。それを論じた篇の題目は、まさに「通国身 [=国・身通ず]」と称されたのである。

「気の清き者を精と為す。人の清き者を賢と為す。身を治むる者は、精を積むを以て宝と為し、国を治る者は、賢を積むを以て道と為す（=治身する者は、精気を蓄えて根元的なエネルギーとし、治国する者は賢者を官僚として集めることを原則とする）。身は心（しん）を以て本と為し、国は君を以て王と為す。精、其の本に積めば、則ち血氣相承受し、賢、其の主に積めば則ち上下相制使す。血氣相承受すれば、則ち形体苦しむ所無く、上下相制使すれば、則ち百官各々其の所を得る。形体苦しむ所無くして、然る後に身得て安んずべきなり。百官各々其の所を得て、然る後に国得て守るべきなり。



夫れ精を致さんと欲する者は、必ず其の形を虚静にし、賢を致さんと欲する者は、必ず其の身を卑謙す。形静かにして志し虚なる者は、精気の趣く所なり。謙尊して自ら卑くする者は、仁賢の事（つか）うる所なり。故に身を治める者は虚静にして以て精を致し、国を治る者は卑謙を尽くして以て授を致すに務む。能く精を致せば、則ち明を合して寿に、能く賢を致せば則ち徳沢洽（あまね）くして国太平なり」（通国身篇）

「治身」に励む者は精気を体内に蓄積して血気の流通を保つ。「治国」に励む者は賢人を集めて活躍させ国を守る。身体を静虚にし、謙遜して驕らないことによって、君主の寿命は延び、賢人は参集し、国家も

太平となる。「王の健康」と「国の健康」という二つの領域が、「虚静、謙遜」の修養状態を保つ王の身体を軸に結合されている。論理は複雑になっているが、構造自体は、『管子』『呂氏春秋』に表現された戦国の「治身治国」思想そのままである。「身は心（しん）を以て本と為し、国は君

を以て王と為す」は、『管子』心術上篇の「心（しん）の体に在るは、君の位なり」を直接に引き継いでいる。

◇天下に君臨せんとせば深山で身体修練せよ

このように、「治身治国」の理念は、『管子』『呂氏春秋』『淮南子』『春秋繁露』と途切れなく伝わってきた。それとともに、国家統治と医療との緊密な関係の自覚も伝承されてきた。医療は、まず何よりも王の身体を媒介に政治と結合した国家的医療であった。

さてここで、わたしたちが黄老文献の系譜の源流であり出発点であると操作的、仮説的にみなしてきた『黄帝四経』に目を転じなくてはならない。実は、『黄帝四経』には、明確に「治身治国」論と指摘できるものは1個所しか見あたらないようである。それは、『黄帝四経』の名称で一括りにされている『経法』『十大経』『称』『道原』4書のうち、『十大経』の五正篇の個所である。

「黄帝、闞冉（えんぜん）に問いて曰く、吾は五正（政）を布施せんと欲す。焉（いず）くにか止まり、焉にか始めん、と。対（こた）えて曰く、始むるは身に在り。中に正度（＝正しい基準）を有（も）ち、後に外の人に及ぶ。外内交接せば、乃ち事の成る所を正す、と。……黄帝曰く、吾は身を未だ自ら知らず。若何（いかに）せん、と。対えて曰く、后（＝王）、身を未だ自ら知らざれば、乃ち深く淵に伏し（＝深山に隠棲し）、以て内形（＝精気が充実した身体）を求めよ。内形已に得れば、後は自ら知り吾が身を屈せよ。黄帝曰く、吾は吾が身を屈せんと欲す。吾身を屈するは若何せん、と。対えて曰く、道同じき者は其の事も同じ、道異なる者は其の事も異なる。今、天下大いに争う。時至らん。后、能（よ）く慎みて争うこと勿（な）からんか、と。黄帝曰く、争うこと勿かれとは若何ぞ。対えて曰く、怒なる者は血気なり。争なる者は外脂膚なり。怒若（も）し発せざれば、浸廩（しんりん、＝浸透した米穀の気）是れが癰疽を為す。后、能く四者（＝血、気、脂、膚）を去れば、枯骨何ぞ能く争わんや、と。黄帝、是において其の国大夫を辞し、博望の山に上り、恬臥すること三年、以て自ら求む」

この『十大経』に関しては、『黄帝内経』と同じく、黄帝と臣下の対話篇であることが見逃せない。そして、黄帝が、天下に君臨するには深山に籠もって身体修練をし、怒りや争いの原因となる血、気、脂、膚を枯れ果てさせよと勧める臣下の言葉に従い、三年の行に臨むという逸話が語られている。そこには、「始むるは身に在り（あらゆる行為の出発点は身を修養することである）」という黄老思想共通の発想がうかがえるとともに、黄老化した後期『莊子』と同じような神仙道の雰囲気も感じられる。

いっぽう、『経法』『称』『道原』など『黄帝四経』の他の3書には、同様な身体修養論も「治身治国」に関わる定型的な言葉も見られない。だとすれば、『十大経』は、他の3書とは作成された年代が異なるか、別系統の思想書かもしれない。そして、「治身治国」の理念が明瞭に指摘できるの

は、『管子』『呂氏春秋』『淮南子』『春秋繁露』においてなので、『黄帝四経』の少なくとも『経法』『称』『道原』は、それら黄帝文献の系列より以前の著述のように思える。もし新しく、漢代に近いか漢代初期の書物ならば、「治身治国」の定型的な語句を欠く理由は見つけ難いからである。

しかし、この問題に解答するには、さらに準備が必要だろう。ここでは、いちおう、『黄帝四経』の『十大経』→『管子』→『呂氏春秋』→『淮南子』→『春秋繁露』という、「治身治国」思想の、（必ずしも継承関係とは言えない、）時代的変遷を仮説的にイメージしておきたい。ということは、「治身治国」思想は黄老思想であるとはいえ、わたしたちがその源流と設定した『黄帝四経』の『経法』『称』『道原』ではまだ形成されず、『十大経』においてもまだ素朴で経験論的であり、国家統治の身体論的帝王学としてはっきりと理念化されたのは、黄老思想が練り上げられていく齊の『管子』段階から後と考えるべきなのかもしれない。

ちょうど切りが良いので、今回はここまでにしておこう。次回は、本題である、「治身治国」思想は『黄帝内経』とどう関係しているのかを吟味する。じっさい、現存の『黄帝内経』（『素問』『靈枢』を総称して便宜的にこう呼んでおく）には、戦国・漢代の黄老文献に一筋に流れる「治身治国」の概念を知らなければ、解釈しきれない篇や経文が存在するのである。

ツイート 3

★この記事に対するご意見や感想をお寄せください»» [Click Here!](#)

HOME

HUMAN WORLD
ヒューマンワールド

書籍 | [DVD](#) | [CD-R](#) | [セミナー](#) | [求人天国](#)

株式会社 [ヒューマンワールド](#)

東京都西東京市田無町7-18-4 TEL.042-444-3678 FAX.042-462-1231

Copyright(c) Human World Co.,Ltd. All rights reserved.